

## ガムランによる附属特別支援学校中学部との交流

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/7210">http://hdl.handle.net/10297/7210</a>

# ガムランによる附属特別支援学校中学部との交流

音楽教育講座 小西潤子

## 1. ガムラン概観

ガムランとはインドネシア、マレーシアにおける合奏音楽の名称でもあり、楽器のセットも意味する。近年では学校教育現場で紹介される機会も増え、たとえば平成 24(2012)年度からの教育芸術社『中学生の音楽1』では、バリ島のプリアタン・グサンヌリ楽団の演奏の様子が巻末口絵約1ページ分の大きさとでカラー刷りされている。静岡大学キャンパスミュージアムは、ゴン・クビヤールという現代バリで典型的な青銅器製の金属打楽器群を中心とする24個の楽器からなる編成のガムランを保有している。見事な彫刻が施され彩色された木枠と青銅製の神々しく光る本体は展示物としても魅力的であるのみならず、誰でも叩いて音を出すことが可能であるため、初心者にとって「敷居が低い」楽器である。多くの楽器が人々の移動に伴って伝播したのに対して、ガムランは、はじめから教育の目的で東南アジア地域から各地にもちこまれた。その先鞭をつけたのが、1960年代に「バイリンガル」に倣って「バイミュージカルティ (bi-musicality)」の概念を提唱し、異なる音楽システムを平行してまなぶことの大切さを主張した民族音楽学者・マントル・フッドである(柘植 1991, 10-14)。

日本のガムラン史は、1973年小泉文夫が東京藝術大学にジャワ・ガムラン導入したことに始まる。現在では、首都圏や関西を拠点とする演奏団をはじめ、各地の大学や楽器博物館など公の施設にも、ジャワやバリのガムランセットが設置されている。日本のガムラン演奏団の中には、世界的に高く評価されているものもある。日本の教科書でようやく「諸民族の音楽」(つまり「インドネシアの音楽」「バリ島の音楽」として紹介され始めたガムランではあるが、近年ではオーストラリアのインドネシア移民を含む演奏団が活躍していたり(MacIntosh 2009, 88)、イギリスの囚人矯正教育に大きな威力を発揮したり(Mendonça 2010)と、グローバルな音楽となっている。

静岡大学におけるガムラン演奏は、2008年11月11日～17日に実施された企画展「ガムラン—青銅のオーケストラの響き」における演奏と同期間内における静岡市立城山中学校(総合学習の3年生1クラス)および静岡県立静岡南高校(9名)を対象とするワークショップに始まった。その後、2009年5月30～31日の静大フェスタ(会場:ツインメッセ)、同10月31日～11月8日焼津市文化センター小ホールで開催された「海のおもしろ民族学展」(第24回国民文化祭・しずおか2009)、2010年5月に大学女性協会全国大会でのアトラクションとして、機会があるごとに学生による演奏団・ナーダ・ブラーマ・チャルヤを再結成し、演奏を行ってきた。この間、静岡在住のインドネシア人を率いてケチャなどバリ島の文化普及活動をしていた静岡大学農学部大学院農学研究科配属(当時)のバリ島出身者・イ・ケトゥット・ムジャ氏の指導を受けてきた。また、「海のおもしろ民族学展」に

際しては、静岡大学大学院教育学研究科作曲専修修了生で浜松市在住の小菅由加里氏に作品を委嘱した。2010年2月には、プспа・メカール Puspа Mekar 主宰の大坪紀子氏にバリ舞踊の指導を受け、同4月には大学を訪問した教育学部附属特別支援学校中学部の生徒を対象に、体験ワークショップを開催した。

ナーダ・ブラーマ・チャルヤは、サークル活動のような固定メンバー制ではない、プロジェクト型演奏団である。いまのところ、固定メンバーが技量を求めて向上するよりは、近い将来に学校教育現場に出る教員養成課程の学生らに、演奏体験の機会を提供することを目指しているからである。ただし、演奏技術を習得して次の学年に引き継ぎをするところまでは、何とか実現している。結成初年は、プロジェクト・メンバーとなった大学院生たちが浜松市楽器博物館主催のガムラン講習会に自主的に参加し、講師の皆川厚一氏から教わったり、ムジャ氏から口伝で演目を習得したりした。当該年に練習に参加していた下級生が、翌年にリーダーシップを発揮するのである。メンバーとして演奏に参加するのみと、リーダーとしてワークショップの企画運営をするのでは経験に大きな差がある。引き継いだ者は自分なりの理解によって工夫をし、他者の学びの手助けをしなければならない。そのプレッシャーを克服して、演奏以上の経験が身につく。本稿では、2011年の同体験ワークショップとガムラン講習会を中心に、プロジェクト型ガムラン演奏団について報告をする。

## 2. 教育学部附属特別支援学校ワークショップ

4月に実施するワークショップは、プロジェクト型ガムラン演奏団にとって厳しい。長期の春休みを挟んで団員を再編し、演目を習得するには期間が短すぎるからである。2011年4月の特別支援学校中学部の体験ワークショップに際しては、それに先立ち同2月にギター・クンチャナ Gita Kencana 主宰の小林江美氏による講習会を開催し、そこに参加した学生を中心にメンバーを募った。10人前後の学生が集まり、大学院生を中心に本番までの1週間、毎日昼休みを使っ

ての練習を行った(図1)。  
2006年6月21日に公布され、2007年4月から施行された「学校教育法等の一部を改正する法律(平成18年法律第80号)」では、生涯のある児童生徒等の教育の一層の充実がはかられている。これに伴い、「障害児教育における音楽教育の意義や音楽の特性を活用する視点を考慮」することが求められる(齋藤2011)。特別支援学校中学部との交流は、学生にとって障害児教育の現場を知る上で貴重な

2011-04-13

### ガムラン演奏

#### 参加者募集

附属特別支援学校中学部の生徒を対象に、4月22日(金)10:00~11:00 静岡大学キャンパスミュージアム(理学部B棟1階)にて、ガムラン(バリ島の青銅楽器群)のワークショップをします。4月14日(木)より土日を除く毎日、キャンパスミュージアムで12:00~12:30練習をします。初めての方、練習のみしか参加できない方も受け付けます。ガムランに触れる機会なので、積極的に参加してください。



(小西)

図1 メンバー募集チラシ

機会である。

今回の特別支援学校中学部校外学習「静大に行こう」では、「静岡大学の特色および大学と自分たちとの関係について知り、静岡大学への興味や関心を深める」「縦割りグループで学習を進め、学部の仲間との親睦を深める」という目標が設定されていた。そして、事前学習①として、1週間前の4月14日にオリエンテーションと縦割りグループを決定し、当日にはそれぞれが個性的なグループ名をつけていた。また前日の4月21日には、事前学習②として、校外学習が初めての1年生は「校外学習への見通しを持つ」「グループの仲間自分の楽しみなことを伝える」、2・3年生は「校外学習の内容を1年生に伝える」「1年生の思いを聞き取る」活動をした。そして、当日は「グループで一緒に行動する」「1年生…先輩の言うことを聞く」「2・3年生…1年をリードしたりフォローしたりする」ことになっていた。校外学習の時間としては、静岡大学に到着するのが午前9時頃、帰りのバスに乗り込むのが午後3時までとされ、「ガムラン体験」は、10時から11時の1時間に組み込まれていた。終了後は、生徒たちは大学食堂で昼食をとり、午後からは村越真教授による「オリエンテーリング体験」をする予定となっていた。

問題は、ガムランとグループ学習をどのように結びつけるかであった。ワークショップの進行役は、教員志望の音楽教育専攻4年の金子奈那子が行った。特別支援学校の生徒たちの実態がイメージしにくいなかでグループ学習をどのように位置づけたらよいかを考え、進行表を作成した(図2)。最初は、生徒たちの横に補助役の学生をつけて、基本となるガンサ類を使ってパターンを奏でることにした。こうして、ある程度ガムランの音楽構造に親しんだ後、構造と奏法の異なる楽器群ごとにグループで移動して体験することで、ある程度グループを意識できるように考えた。補助役の学生は、全体の進行に準じながらも、「一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育」(齋藤2011)に少しでも近づけることを心がけた。ワークショップ開始直後、学生たちはまだ生徒たちとの距離の取り方にもぎこちなさが目立った。しかし、次第に生徒の反応を確かめながら、自らも生き生きと表情で生徒たちの援助をすることができた(写真1)。



写真1 生徒に語りかける

2011/04/22 10:00~11:00

展開	具体的な流れと活動内容	留意点、学生の行動
導入 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ガムランの周りに座る</li> <li>・おやくそく</li> <li>・バリ島の紹介</li> <li>・ガムランの紹介</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・模範演奏</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自担当のイスに座っている</li> <li>・担当の楽器に移動</li> <li>1 ゴング …久保さん</li> <li>2 カジャール、チェンチェン …長澤さん</li> <li>3 クンダン …鈴木さん、柴山さん</li> <li>4 レヨン …殿岡さん、本田さん</li> <li>5 ジュブラグ、ジェゴガン …中島さん</li> <li>・合図：鈴木さん</li> <li>・演奏後、もとの位置に戻る</li> </ul>
体験 A (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループの説明</li> <li>☆2人で1つのガムランについてもらい、前後で1グループとする (1~5グループ)</li> <li>☆ガムランの右の人、左の人</li> <li>・実際にたたいてもらう</li> <li>① たたいて、とめる</li> <li>左の人に交代し、同じように進める (以下同じ)</li> <li>② パターンを少したたく (3323)</li> <li>③ パターンをもう少し進める (34543)</li> <li>④ パターンをつなげる (33234543)</li> <li>・右の人、左の人に分けて発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パターンをたたく時には、音止めをサポートする</li> <li>・パターンが難しいようであれば、3のみにする</li> </ul>
体験 B (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに、他の楽器を1つ体験</li> <li>グループ1…ゴング</li> <li>グループ2…カジャール、チェンチェン</li> <li>グループ3…クンダン</li> <li>グループ4…レヨン</li> <li>グループ5…ジュブラグ、ジェゴガン</li> <li>・グループごとに発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当の楽器につく (紹介した楽器と同じ)</li> <li>・担当の楽器がない人は、グループを誘導する</li> <li>・楽器の特徴を、生徒に聞いて引き出してあげる</li> </ul>
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元の位置に戻り、感想を述べる</li> </ul>	

図2 ワークショップ進行表 (金子奈那子作成)

### 3. ガムランの技を磨く

ナーダ・ブラーマ・チャルヤによるプロジェクト型演奏団によるワークショップは、主催者側と参加者側が大きなタイムラグなしに学んでいることに特徴づけられる。学生たちからは、「自分たちに出来るのだろうか?」という不安の声が聞かれるし、参加者に十分な知識や技術を提供できないことも承知している。その一方で、タイムラグなしの学びにもそれなりの意義はあると考えている。ガムランを教科書の写真でしか見たことのない生徒

やその存在さえ知らなかった一般来場者が、目前にある楽器の音を実際に聴き、自らの力で音を出してみる体験の場を提供することは、ガムラン体験の第一歩として重要である。実際に、2008年の企画展に際して、インターネットで事前学習をして体験学習に臨んだ高校生たちは、「自分が思っていたガムランと実際のガムランは違っていた」「西洋音楽とは音質とか音色が全然違う」「実際行ってみたら、すごく楽しかった」など、ガムランの響く現場体験の新鮮さを感想にまとめていた。ワークショップで「模範演奏」を示すことはできないが、ガムランの技を介してのコミュニケーションは可能だと考えるのである。

学びつつ教えるのは、現在の学校現場と似たような状況ではないかとも考えている。音楽の授業が多様な音楽文化の学びの機会と位置づけられたのは大変評価できるが、一方で教員の側には準備のための十分な学びの時間が確保されていないのではないだろうか。転換期においてできる限りよい授業をしていくには、教員が学びながら教えるしかないだろう。教員を志望する学生にとって、ガムランの技を学ぶことはその技を習得するにとどまらず、新しいことにチャレンジするための自信につながると考えている。つまり、現場ですぐ使える方法だともいえるのである。ある高校に勤務する修了生は、「大学院でガムランをやっておいて、本当によかったです。」と真顔で語ってくれた。ほかにも、就職先の東京でガムラン・グループを訪ねた者もいると聞いている。



写真2 ガムラン講習会

2012年2月22日、学生有志を募って今年度初めてのガムラン講習会を開催し、昨年度と同様、小林江美氏に指導を受けた。受講した学生には、すでに舞台での演奏経験のある者も含まれていた。彼らが核となって、来年度の演奏活動を行うことを期待している。というのも、実は2012年4月に静岡県内の高校教員向けのガムラン体験ワークショップを行うことがすでに決定しており、そこで披露する演目を習得しておく必要があったのである。今年度と同様、新学期早々に練習日程を組まねばならない。

ガムランは、異文化という境界が明らかな響きを持つという意味で扱いやすい教材であるが、音楽による異文化理解にはガムランが必要であるわけではない。実は、ピアノやギ

ターなど児童生徒や教員にとって身近な楽器を使っても、異文化理解は可能なのである。そのように文化という観点から楽器を見てこなかったのは、音楽教育の中心が技の習得に偏りがちであったためである。ナーダ・ブラーマ・チャルヤの考え方は、文化としての音楽理解に根ざすものである。技は文化に付随するものだが、効率的だからといって技だけを切り離して別の文脈において習得することは好ましくない。技の向上は、モチベーションを高めるが、それ自体に学ぶことの目標があるわけではない。そうではなくて、技から文化のある側面を学ぶ、そのための技の習得をしなければならないと考える。

【参考文献】

MacIntosh, Jonathan 2009 'Indonesians and Australians Playing Javanese Gamelan in Perth, Western Australia: Community and the Negotiation of Music Identities', *The Asia and Pacific Journal of Anthropology* 10-2: 80-97.

Mendonça, Maria 2010 'Gamelan in Prisons in England and Scotland: Narratives of Transformation and the "Good Vibrations" of Educational Rhetoric', *Ethnomusicology* 54-3, 369-394.

齋藤一雄 2011 「特別支援教育と音楽教育」 『初等科音楽教育法 [改訂版] 小学校教員養成課程用』 音楽之友社, 132-133.

柘植元一 1991 『世界音楽への招待—民族音楽学入門』 音楽之友社.